
高校生活と探し物

撫子 雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生活と探し物

【Nコード】

N8746Z

【作者名】

撫子 雪姫

【あらすじ】

あああ高校（仮）で生活して、探し物を見つける天神どくろのお話

入学試験と拷問（前書き）

初めてですので、お手柔らかにお願いします。

入学試験と拷問

こ、ここが俺の受験の高校、あああ高校（仮）かぁ・・・

ん？（仮）って…まだ名前が決まってないのかな？

そうなら適当すぎるだろ・・・

先生に勧められて入ったんだけど、どういう高校なのか、謎だ。

ネットで調べても、都市伝説ばかりだし・・・

都市伝説によると、頭や運動神経がかなりいい人たちが集められるとか・・・

この先不安だ。

俺はその不安を振り払って、試験会場へ向かった。

試験会場に入ると、重苦しい雰囲気俺を襲った。

プレッシャーというか、なんというか、とにかく空気が張り詰めている。

ここから早く逃げ出したいくらいの空気が俺の具合を悪くする。

・・・腹が痛い。

うわ、最悪。こんなときに・・・

と・・・トイレに行こう！今ならまだ間に合う！！・・・気がする！！

ジャー・・・

「ふう・・・今何ぞっつ！！やばっ！！10秒前だし！！」

この時計は正確なのかどうか知らねえけど、完全に遅れる！！

俺は全力で走った。走りまくった。

ガラッ

「セ・・・セーフ?・・・なの・・・か?」

しーん

うう・・・アウトか?

「早く席に着け、天神どくろくアマガミ ドクロく」

セーフ? セーフなのか?

まあいいか。とにかく座ろう。

「私は担当の希咲遙くキサキ ハルカくだ。」

おお、よく見たら超美人。

「では、今から筆記試験を開始する。ヘタな真似をしたら即失格だ。いいな?」

プリントが配られる。

「開始つ!!」

バツ

おお!?なんだこれ!? 超難しいじゃねえか!! 普通なら絶対に解けねえぞ!!

・ だが俺は普通ではない! 天才秀才天神どくろく様だ!

・

筆記試験が終わるころには、俺はゲツソリになっていた。

「な・・・なんだあの問題は・・・拷問並みに難しいぞ・・・」

「おい！まだバテるなハゲ！！次はもつときついのあるんだぞ」

・・・え？

「ふん、聞いて驚け。いや、これを聞いて驚かない者はいない。いや、すこしはいるかもしれんが・・・」

な、なんだ？

「体力試験だ！！」

へえー・・・ふえ？た、体力試験だと？そんなの聞いてねえよっ！！

「ふふふ、私には見えるぞ。貴様らのバテる姿が。」

いやいやいやいやまじで無いわーまじありえねえしーマジ聞いてねえしー

「さあ、移動するぞ。体育館に」

続く

入学試験と拷問（後書き）

かなり読みずらいと思いますし、へたくソだと思っています。
最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験とと拷問2 (前書き)

書けるときは書かないとって思ってた話目です。

入学試験と拷問2

た・・・体力試験だと!?

も、もちろんやってやるさ!母ちゃんに約束したからな!

長い廊下を歩いて2分。ようやく体育館についた。

「よく聞け。今から3人一組のパーティーを作ってもらおう。好きな相手でも何でもいい。」

え。よく見たら知ってる人いませんけど。これ俺残るパターンじゃね?

「ん、じゃあもう組んでいいぞ。必ず3人一組な。確実に余らないからな。制限時間10分。」

や、やってやるぜ!!余らないんだからな!

たぶんこれは積極性とかいろいろ見られると思うぞ!俺的に。

まあまずは、なんかみんなに話しかけられなくてモジモジしている女の子に限る!!なんかかわいいし

と思ったらさっそく発見!!ポニーテールの茶髪の女の子!かわいい!!!!ものすごく!!

あの子すげーモジモジしてるぞ。

とりあえず話しかけてみるか。

「あ、あの俺と一緒に組みませんか?あ、無理ならいいんだけど・・・」

「え!?嘘!!本当ですか!?!ありがとうございます!!誰にも話しかけられなくて、もう無理かと思いました(ニコッ)(」

か、かわええく／＼／＼

「名前、なんていうんですか？あつ私、春色咲楽くハルイロ サクラ>っていいいます」

「俺は、天神どくろ」

すごく魅力的な名前だ。咲楽ちゃんの雰囲気こそっくりだ。

「私、同じ学校の人連れてきますので、少し待っていてください」

咲楽ちゃんは大きく息を吸うと、精いっぱいの声で、

「巻くうー！ー！ー！ん！ー！ー！」

4秒後

「なんだ？」

「さっすが巻君！早いね！俊足だね！」

お、黒髪セミロングのナイスガイだ。

「どくろくん！紹介するね。巻蓮くマキ レン>君！おさななじみだよ」

いつのまにか咲楽ちゃんがタメ語になってる！すげー嬉しいんですけどー！！

「あのね、巻君、一緒に組んでくれるよね？」

「あ、あたりまえだ。」

こいつ、咲楽ちゃんの可愛さに一撃でやられたな

「よろしくなっ！蓮っ 俺の名前は、「天神どくろだろ。」

う、あの腹痛事件（？）で一気に目立ってしまったか。

「あ、言い忘れてしまっていたが、パーティーが組めた次第、あそこの受付で登録してもらえ。」

おいおいおい、言い忘れるなよな。試験管だろ。一応。

「さ、パーティーも組めたところだし、さっそく登録しに行くか。」
「いえっさあー！」

おい待て、なぜ貴様が仕切っている。ま、いいけどな。

「そうだなっ。さ、行こうぜ！」

・

・

・

「よし、これで全員組めたな。ドアを開けたらアスレチック的なものが待っている。ゴールまでパーティー全員でたどり着くんないかな？」

よし、気合入れいっくぜえー！！！！

続く

入学試験とと拷問2（後書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。
一瞬でも読んで下さった方もありがとうございます。

入学試験と拷問3（前書き）

3話目です。

よろしくおねがいます。

入学試験と拷問3

ガチャ

体育館の扉が開かれた。

・・・広つつつ!!

どれくらい広いかというものすごくおおおおおおく広い!!

その体育館の中になり大きいアスレチック的なものがあった。

それもまた、ゴールが見えないほどの大きさだ。

たぶんトラップなどという仕掛けもあるのだろう。

「ゴール、できるかなあ？」

「大丈夫じゃね？何とか」

頑張れば何とかなる!! たぶん・・・

「お前、頑張れば何とかなる!!・・・とか考えてないよな？」

「う・・・計画的に頑張ればいいと思います。」

何だこいつ！読心術でも使えるのか!?

「では、行くぞ！フライングはなしだからな。」

OK!! 遥先生。

「よーい・・・ドンー！」

遥先生の掛け声により、いつせいに全員が走り出した。

・
・
・
「チームワークを乱すなよ。ゴールの為にな(ニヤリ)」

「くっそ！超きっつい！！」

ずっと上るのはっかしで、超疲れるんですけど！！

「疲れるね(ニコッ)」

咲楽ちゃん、全然疲れているように見えませんが？

おまけに蓮なんかは顔色一つ変えやしない。

くそっ腹立つ！

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

「おい！いきなりペースを上げるなバカ！！はぐれたらどうするつもりだ！」

「なっなんだよ！いいじゃねーかよ」

「どこがいいのかさっぱりわからないなバカ！」

「なっバカバカ言っなよ！！頑張ってるじゃねーか俺が！全身全霊

「!!」

「お前の頑張りは空回りしてんだよ!」

今にも顔がくっつきそうなくらい顔を近くにして言い争っている。

「巻君もどくる君も仲良しだね!」

グリンツと咲楽に顔を向けて、

「どこをどう見たら仲良しに見えるんだよ!」

やべえハモった。

息びったりじゃん。

「チツ オラ、さっさと行くぞ。」

「わかってるっつーの!」

俺は反抗期の息子かよ!!

もう何としてでも合格して蓮を見返してやる!

俺が決意を決めた時だった。

とんつとんつとんつ

木の柱を軽い足取りで跳ぶように進むパーティーがいた。

「なんだありゃ、すごすぎるだろ。」

「すごいね。ねっ巻君!」

「そっだな。」

短髪の赤いマフラーをした男は、首元に狐の入れ墨あって、三つ編みの女は腕に蛇の入れ墨、黒髪のポニーテールの男か女かわからない奴は、背中に般若の入れ墨があった。

不良か？入れ墨とか・・・

まあ、すごいことに変わりはない。

「あ、思い出した。さっきの入れ墨があったパーティーのこと。」

「有名なのか？」

「ん、まあな。」

正直、なんとなくだがあいつらは危険な感じがした。

「あいつらの中学校は、超エリート、天明中学校といってな、エスカレーター式のところだ。」

「へえーやっぱ雰囲気全然違ったよねー。なんか怖かった！」

咲楽ちゃんも感じてたのか。

なんか超エリートって感じ。嫌味な奴らだ。

まあ俺も成績は良かったからな。足元にも及ばないことはない。

「でだな、入れ墨があるやつらは特に成績がよかったやつなんだ。ほとんどの高校から推薦がきているはずだ。」

な、すげー！！！！！

ってこの高校そんなにすごい高校だったんだ！！

この先、ちゃんと生きていけるか心配になった。

続く

入学試験と拷問3（後書き）

半端な終わり方ですみません…
読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験と拷問4（前書き）

4話目です。よろしくお願ひします。

入学試験と拷問4

はあ、疲れた。

なんだこれ、ただのアスレチック的なものじゃねえだろ！……
つてか、

「同じところをぐるぐる回ってる気がする。」

「そうかな？」

「俺もちよつど天神と同じことを考えていた。奇遇だな。」

なんだ、蓮もか。

「なんか印でもつけておくか？もしかしたら同じところをぐるぐる
回ってるかもしれないからな。」

「おっそれならわかりやすいしな！」

「でもそれじゃあほかの人にも気づかれちゃうよ？先に行かれちゃ
うよ？」

うーーーーん……………

「あつ！そこにさっきの天明のやつらがいるじゃん！！」

「あの人たちについていけば何とかかなるんじゃないかな？」

「そうだな。たまにはできるじゃねえか。」

「たまにってなんだよ。まだ少ししか関わってねえじゃねえかよっ
！！」

「……………。」

シカトしやがったこいつ……………

とことんムカツク野郎だなこいつ……………

「お前、とことんムカツク野郎だなこいつ……。とか思っ
てないよな？」

「思ってたませーん!!」

やっぱりこいつ読心術使えるだろ!!

「よし、あいつらから目を離すなよ。」

「わかったー!!巻君かっこいいー!!」

おい、それ考えたの俺だし!!

俺も咲楽ちゃんにかっこいいって言われたし!!ずりぞ!!

「おい、天神、ぼーつとすんな」

はっ俺としたことが!

「あ、あの人たち、なんかあそこをずっとつるちよろしてる!!」

「? あそつこで、ただの行き止まりじゃん。」

ん?あれ?あいつら、何かを探してる?

天明の人たちは、一枚の板を押しした。

すると、床の板が落ちて、下に行った。

「!?!? なんだありやあ!?!」

「ただの仕掛けだろ。そろそろほかのやつらも気づき始めているな。」

「じゃあさっさと行っちゃおう!!レッシン!!」

どくろ達はさつき天明の人達がいたところに走っていった。

「たしか、ここら辺だったはず……」

ガコンッ

ふっふっふ……。

これで一步合格に近づいて……
……あれ？

ガコンッ

……あれ？

ガコンッ ガコンッ ガコガコガコガコガコッ

「なあ……何も起こらないぞ？」

「そうだな。」

「うん。そうだね。」

う……うそだろおおおおお！！

どくろは頭を抱えて取り乱した。

「まあ落ち着けて。これと同じような行き止まりはほかにあった
だろ？」

「そこを手当たり次第、さつきみたいに板を押ししていけば何とかな
るよっ！」

蓮、咲楽ちゃん……

「応っ！！ゴール目指して頑張ろうぜ！！」

どくろは珍しくキメ顔になった。

「ふん。お前が頑張ろうと頑張んなくても必ずゴールする。」

「うふふ。一緒にゴールしようねっ(ニコッ)」

蓮はとにかく、咲楽ちゃんのスマイル最高おおお！！

「うおおおおおお！！！！なんかやる気出てきた！！いつくぜええええ！！！」

「だああああああああ！！お前一人で先に進むなよ！さっきも言ったけどはぐれたらどうするんだ！」

「うっせえなあ」

「お前のほうがうるさい！！！」

「お母さんかよ！」

「ちげえよ！！！」

なんだよこいつ！！俺にばかりつつかかってきてよ！

「二人とも本当に仲がいいねえ」

「どこがだよ！！！」

咲楽ちゃん！！おれ、こいつ苦手だ！！

なんでパーティーに入れたんだよ！！幼馴染だからって性格悪すぎだろ！！

ちよっとかっこいいからって調子に乗るなよ！

俺のほうがかっこよくて愛らしくて素直だもんねっ！

「お前、心の中で俺を馬鹿にした挙句、自画自賛しただろ。」

「？ 咲楽ちゃん、自画自賛って何？」

「自分で自分を褒めることだよ。」

へえ〜そうなんだ。っじゃなくて!!

「ちげーよ! いや、そうじゃないけど、えええええと・・・そ、
そくだよ! 俺は自分のことを褒めました!褒めまくりました!なん
か文句あつか!!」

「そうか。そのことについては特に文句はない。だが、じゃあ俺を
馬鹿にしたことについては？」

「かなり馬鹿にしたぜ!性格が悪くて、ちょっとかっこいいからっ
て調子に乗ってるってな!!」

「はあ!?!いつ俺が調子に乗ったんだよ!」

「さつきからずっとじゃボケェ!!」

「意味わかんねえよ!」

あああ!!もうしらねえ!!どうにでもなっちまえ!

「二人とも、喧嘩はやめようよ。」

咲楽ちゃんがなんと言おうと構うか!!

「もおいい!!知るか!!俺一人で行く!!」

「どくる君、一回落ち着こうよ」

「落ち着けるか!全ては蓮のせいだ!!」

「はあ!?!なんでだよ!!」

そくだ、全ては蓮のせいだ。俺がせっかくやる気を出しているのに・・・

「おい、お前希咲先生の話、ちゃんと聞いてたのか！？パーティー全員でっせ俺は先に行くからな！！」

そう言いつつ、どくろは足早にその場を去った。

「はあ……。ったく、どんだけわがままなんだ。天神どくろってやつは……。」

続く

入学試験と拷問4（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

これからどくる君はどうなってしまっんでしょうね（笑）

入学試験と拷問5（前書き）

5話目です。

入学試験と拷問シリーズがやけに長いですね。
よろしくお願いします。

なんだっけ、そういえば遙先生がなんか言っていたはず……
はっつ！！！！！

「ゴールは全員でたどり着かなきゃいけねえんじゃねえかよ！！」

たしか蓮もそういうこと言ってた気がする！！

なんだよ！！全部蓮が言ってたじゃん！！

……なんか悔しい。

今頃咲楽ちゃんと蓮は必死に俺のこと探しているだろうなあ。

「うっし！行くぜ！待ってるよ！咲楽ちゃん！！蓮っ！！」

どくろがそう言った瞬間、

「その必要はないぞ。バカ。」

「ふふ。こんなところにいたんだ。探したよ？迷子のおバカさん。」

上から蓮と咲楽が降りてきた。

「え？蓮？咲楽ちゃん？」

「ったく、勢いよく飛び出したと思ったら、200メートル以内に
いるとは思わなかったぜ。」

「けっこつ遠くまで探したんだよ？」

咲楽ちゃん、蓮……。

俺………俺………幸せ者だあああああああ
！！

「うう、ごめん。わがままで、自分勝手に……」

「いや、俺こそきついことを言ってしまったな。」

「喧嘩両成敗だねっ！」

「ああ、そうだな。」

俺、このパーティーでよかったああああああああ！！

「うわっ！鼻水垂らすなバカっつ！汚ねえ！！！」

「おふえ、ファンぢえぎゆしちやぎやビィヴやびゅヴおおおお
おおお！！！！！」

「何言ってるわかんねーよ！！！」

・

・

・

「ふいーーーーー」

「やっと落ち着いたか。」

どくろはさっきまで涙と鼻水が止まらなかったのだ。

「ほら、さっさといくぞ。だんだん人が少なくなってきた。」

「あ、本当だあ。」

「すまん。涙と鼻水の2TOPが止まらなかったんだ。」

ちょうど目の前に行き止まりがあった。

「お、ちょうどいいじゃん。」

「よし、そこに乗ね。じゃ、押すぞー。」

ガコンッ

「!!--」

「うおっ!!--」

「きゃっ!!--」

ものすごいスピードで落ちていく。
下にはあっという間についた。

「早かったな。」

「そうだね。」

「うん。」

なんか、さっきの楽しかったな。ガコンッっていう感じ。

「よし、行くぞ。天神、さっきみたいなこともうすんなよ。」

「わかってるっつーの!!--」

しばらく歩いていくと、丸太一本があった。

「え?ここを歩くの?」

咲楽ちゃんの顔が青ざめている。

「大丈夫か?咲楽。」

「全然大丈夫じゃないよお……………こわいよお……………」

こんなこと思っつのは失礼かもしれないが、怖がってガクガクしている咲楽ちゃんはすごくかわいい。

「ふえ？」

蓮がひよいつと咲楽をお姫様抱っこした。

ず、ずるいぞ！！蓮つつつ！！！！

「はあ、ちゃんと飯食ってないだろ。肉食え。肉。」

「ちゃ、ちゃんと食べてるモン！」

なんだこの二人との関係は……。

は、入れる気がしない。二人の間に花が咲いてるぞ。

「れ、蓮。その状態で行くのか？」

「あたりまえだろ。」

「す、少し恥ずかしいけれど、巻君なら安心できるし、信用してるんだっ！」

NOおおおおおおおおお！！！！

破局

なんなんだ。あの二人の間にあるものは！！これがおさななじみというやつか！！

べ、べつにうらやましいとか思ってたねーしいー

そんなん１ミリも思ってたねーしいー

「？ 何変な顔してんだ。」

「べつべつにー。」

「ふーん。じゃ、行くぞ。」

うわ、意外と怖いぞこれ。

え！？なにスイスイ進んでんの！？蓮のやつ！！

「何ガン見してんだよ。咲楽。」

「いやあ、なんかこういうのかっこいいなあって思ってた!」

「ありがとうな。蓮。」

「ふん。当たり前なことをしたまでだ。」

「こっこれって正面から素直にありがとうって言われると照れるっていうやつ? 卷君。」

「だっ誰が照れるか!」

「照れんなってwww」

「だから照れてねえ!」

それから坂を上ったり、一枚の板を渡ったり、ロッククライミングみたいなもやった。

・

・

・

「このアスレチック的なもの、すぐ手が込んでるよな。」

「そうだな。」

「つかれたあ」

お!? あれは!?! まさかの!?!

「ゴール……だな。」

「やったあああああああ!」

「ほら、最後はみんなでゴール! だよな?」

「あたりまえだ。」

みんなでいっせいにゴールへ足を運び入れた。
ゴールに待ち構えていたらしい遙先生が、

「150組中64位・・・か。なかなかいい成績だな。ゴールやついたやつらは面接に行っている。そこにある紙を持っていけ。入り口から出てすぐの曲がり角をまっすぐ行け。一番奥の部屋が面接室だ。」

そう言って話を終わらせた。どうやら質問は受け付けないらしい。

続く

入学試験と拷問5（後書き）

多分けっこう長く書いた気がします。
読んでくださってありがとうございます。

面接と帰り道（前書き）

5話目です。よろしくお願ひします。

面接と帰り道

面接はありきたりなものだった。

なぜこの高校に入ろうと思ったのかとか、この高校に入ったら何をしたいのかなどなど・・・

天神どくろはただ1つ気になる質問があった。

「君は、死ぬ覚悟がありますか？又はどんな困難にも立ち向かうことが出来ますか？」

え？何その質問。

どくろはその質問にすぐ答えられなかった。

なんか非日常なことが起こるのか？この高校は。まあとりあえず・・・

「場合によってはできると思います。」

面接官はこの答えに少し驚いたらしく、少し眼を見開いた。

え。なんか変な答え方したかな。ただでさえ怖い顔つきなのにさらに怖くなった気がする・・・

「（ボソツ）普通の人ならばすぐに死ぬ覚悟あります！とか、できますっ！って答えるのにな・・・。」

なんかつぶやきました？え。なになに。気になるんですけど。

・
・
・
「ふあああああ！！！緊張したあああ！！！」

5メートルくらいうしろから、

「どくろくーいーん。」

こっ！この声は！！！

「咲楽ちゃん！！！と……蓮！！！」

何であいつもいるんだよっ！！！いや、べつにいいけどぞ。

「どうだった？緊張した？」

「まあね。ってかさ、面接官怖くなかった？」

「超怖かった！！！目つきが悪かった！！！」

やっぱり怖かったよね！！

「じゃ、私達家こっちだから。バイバーイ」

ブンブンと手を振っていたので、どくろも手を振り返した。

やっぱりかわいいなあ……。咲楽ちゃん。

俺はこれから起こる数々の困難を知る由もなかった。

続く

面接と帰り道（後書き）

短いですね。

そうです。平均的に文字数が少ないんです。
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746z/>

高校生活と探し物

2011年12月29日10時49分発行